

# 十和田でにぎわう



事業対象地域 青森県十和田市十和田中央商店街

受託機関 合同会社うぶすな LLC

## 1

### 事業内容

#### 実施目的

まず、「十和田市外」からこの街で働きたい、この商店街を盛り上げたいという想いがある若者や大人を呼び込みたいという気持ちと、もう一方で、「十和田市内」の市民に、いい刺激と活力を与えたい、という意気込みからスタートした。

#### 実施期間

平成 22 年 8 月 12 日 → 平成 23 年 2 月 21 日

スケジュール	2010年					2011年		
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			十和田デザインセンター事務局開設●					
			スクール事業スタート●					
				スクール●	●	●	●	●
							事務局、受講生意見交換会開催●	

#### 実施内容

現代アートを活用したまちづくりプロジェクト  
十和田市「Arts Towada」

これらを踏まえながら

- 店舗の確保…  
空き店舗、既存店舗の状態確認とArts Towadaイベントに向けた改装
- 新たな商店主の募集…  
新規出店者、既存店舗の後継者を公募する
- アートイベントへの試験的協力…  
デザインセンター受講生に対して、Arts Towada各種イベントにおける試験的な場の機会を用意
- スクールの開催…  
十和田デザインセンターのキックオフ講座として開催
- 十和田の魅力を伝えるツアー…  
十和田に興味のある企業、個人を対象に実施

#### 実施体制

団体名	役割・得意分野など
うぶすな LLC	企画運営など
(株) oiseau	企画運営サポートなど

## 対象地域の状況の把握

### 十和田の商業状況

中心市街地はインフラが整備され、公共施設等は官庁街通り周辺に集積している。官庁街通りには十和田市現代美術館を中核とする野外芸術文化ゾーンが完成し、街に新たな賑わいを呼んでいる。一方で、稲生町の中心商店街は、郊外店の進出等により年間商品販売額の減少、空き店舗の増加が顕著で活気が失われている。また、区域内は居住人口の減少・高齢化が進み、歩行者自転車通行量の減少、地価の下落といった問題も生じている。

### 十和田湖

2つの湖がある。透明度でも群を抜く世界的に有名なカルデラ「十和田湖」。長靴のような形をした「小川原湖（おがわらこ）」は、ニジマスやうなぎの出荷量で日本一。その十和田湖から流れる奥入瀬川、そして、人工河川・稲生川（いなおいがわ）がある。どちらも肥沃な栄養素を下流域にあたえ、農作物づくりに多大な貢献をもたらしている。枯れることのない水資源は、住民にとってかけがえのない生活用水でもある。

### 農業

十和田は国内でも有数の根菜類の生産地区で、カボチャ、ナガイモ、ゴボウ、ニンジン、ヤーコンなどの生産が盛んに行われている。また、ニンニクもこの地域では生産量が日本一となるなど、農産地としても大変魅力のある地域となっている。

### 商店街

国道4号に面する十和田商店街には、かつて2つのデパート（十和田松木屋、ジョイフルシティ十和田亀屋）が建ち並んでいたが、近郊市町村への大型店進出などから客足が減り、平成11～12年にかけて相次いで閉店。十和田亀屋跡は商工会議所の要望により、1階部分のみで100円均一のスーパーマーケットが開店したが、13年に経営破綻して閉店。空き店舗状態ののち18年に解体され、中心商店街の空洞化が顕著になった。また、幹線道路が中心街に入り込み、商店街としての機能を衰退させ、空き店舗も目立つようになった。

### Arts Towada：野外芸術文化ゾーン

十和田市はより魅力的で美しい官庁街通りの景観を作り出し、未来へ向けた新しいまちづくりの一環として「Arts Towada」計画に取り組んでいる。官庁街通り＝屋外空間を舞台に、通り全体を美術館に見立て、多様なアート作品を展開していくもの。アート作品に加えて十和田市の歴史、自然、地域の活力を引き出し未来へつなげる仕掛けを盛り込み、十和田市を「アートの街」「感動創造都市」として多くの人々に印象づけることをめざしている。

## 事業計画と事業内容の提案、目標の設定

### デザインが果たす役割、そして「青森新幹線」の可能性

東北新幹線が東京－八戸間から七戸・十和田駅、新青森駅まで延伸したことで、十和田へのアクセスが向上し、注目が高まることが予想される。その受け入れ体制として地域産品を利用した加工品・土産の開発、カフェ、販売ショップなどの“場づくり”が急務となった。

コミュニケーション、スキルなどの総合的な教育プログラムをもとに人材育成に取り組むにあたり、その拠点を「デザインセンター」と名付けた。地方にいま必要なデザインとどうやって向き合うか——その場づくりを行い、その過程で新たな商店主を育むことをめざす。

### カフェを通じた街づくり

単に飲食店やショップを出店することが目的ではない。その土地に似合う店づくり、商店街づくりをめざす。そこでまず、周辺で生活する人たちの特性（服装、化粧、眼鏡やバッグの種類、髪型など）を観察して、その地域で生活する人のプロフィールやスタイルをつかみ、そういう人たちに好かれ、日常生活を豊かにできる店・施設のイメージを描き、具体化していくことにした。

単に店内で食事を提供するだけでなく、さまざまな機能を用意することでその店が地域コミュニティの基点となり、ひとりのお客さんにいろいろな形で利用してもらえる。このように、店がそれぞれのお客さんのライフスタイルを充実させ、「自分らしく過ごせる場所＝サードプレイス」として活用されることで、その店は地域の日常生活に欠かせない社会基盤へと

成長していくことになる。

そこで十和田デザインセンターでは、実際に「カフェを通じた街づくりの事例をふまえた講義」と「ワークショップ」を通じて、実践的に学ぶことができるカフェをつくった。

カフェはすでに、飲食店というだけでなく、多種多様な機能を併設しはじめている。そのカフェのモデルが、新たな街づくりの一助になっていこう。

そのため、新しく商店街で店を始めたい人、今の店の将来が心配な人、カフェが好きな人、店づくりの効果的なアイデアを探している人、そんな方々を対象とする。

### 新しい商店街の創出

デザインセンターを通じて生まれた商品、アイデアが、ここで販売される。もちろん実店舗以外にも、インターネットを利用したEC（電子商取引）サイトの構築や、首都圏向けの販売も拡充していく足がかりをつくる。カフェや郵便局、ギャラリーや図書館など、市民活動ができる自由なスペースを作り出す。



2

育成計画実施における状況

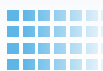
「アート」と「デザイン」を通じて、新しいコミュニケーションツールをつくる仕組みを考え、地元農産物や加工・伝統工芸品、「人力」を活用しながら、新しい産業を生み出すことを念頭に置いた。

平成22年10月下旬	十和田デザインセンター事務局開設
11月19日	スクール事業スタート（第1回）
12月7日、8日、14日	スクール第2～4回実施
平成23年1月13日、 14日、20日、21日	スクール第5回～8回開催
1月28日	事務局、受講生意見交換会開催

3

目標に対する成果（定量・定性面を含む）

まちづくりの方向性を踏まえながら、平成22年度の事業として店舗の確保、新たな店主の募集などのプログラムを段階的に準備・実施した。



アートイベントへの試験的協力

デザインセンター受講生を対象に、今後、商店街における活動を支援するために、店主育成の一環として、Arts Towada 各種イベントにおける試験的な場の機会を用意した。



スクールの開催

十和田デザインセンターの「キックオフ講座」として、全8回の講座を開催した。

参加者は固定メンバーで12名ほど、ほかに各回ごとに1～4名の聴講者があった。



十和田の魅力を伝えるツアーの実施

実際に十和田に足を運んでもらうような工夫と、そこから得られる「外部の意見」を拾い上げ、今後進むべき方向性を探った。対象としたのは十和田に興味のある企業や個人。

十和田デザインセンターホームページを開設



十和田デザインセンターホームページのトップページ。

市内にアートスペースを“飛び火”させ、街全体をアートゾーンとして見立てる十和田市「Arts Towada」計画にそって商店街の空き店舗を活用、新たな面白いコミュニケーションが生まれる——そうした動きを随時発信するメディアとして平成22年12月、ホームページを開設した。

## 十和田デザインセンター「キックオフ講座」

多彩な講師陣を招き、十和田市市民文化センターを会場に、8回にわたってつぎのような内容で開催した。

第1回スクール(11月19日)

### オリエンテーション



デザインセンターの主旨を説明する事務局松田(中央)

開講式には市内外の約20人が出席。商店街は「イベントではなく、商売でにぎわいを戻すことが必要」と狙いを説明した。

第5回スクール(1月13日)

### アートからの「まち育て」



まちづくりを「まち育て」という手法で進める北原啓司氏が講師。十和田市商店街での「まち育て」について検証した。

弘前大学教育学部副学部長・教授の北原 啓司さん

第2回スクール(12月7日)

### 街に必要なカフェとは？

水戸芸術館そばにある「CAFE DINER ROOM」のオーナー・高野要一郎氏を招き、美術館と街カフェの関係、実際に経営をされて感じたことなどを聞いた。



ゲストの高野要一郎さん

第6回スクール(1月14日)

### 「観光マイスター」という仕事



観光案内施設を通じて情報を「どのように魅せて、伝えるか」という、十和田に足りない課題について山口氏と考えた。

有限会社シュシュ(長崎県大村市) 代表取締役の山口 成美さん(長崎県観光マイスター)

第3回スクール(12月8日)

### 十和田デザイン会議

黒ニンニクのブランディング企画、レンタル自転車事業、十和田デザインセンターが開設するホームページとロゴ展開などのテーマについて、事務局と受講生によるディスカッションを行った。



第7回スクール(1月20日)

### 十和田新規事業部

トライアル出店をめざし、大谷氏に「起業って?」「仕事を作り出すことの意義」など、十和田で生業にする術や意気込みを聞いた。

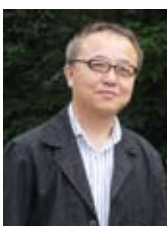


八戸大学・八戸短期大学総合研究所長 教授の大谷 真樹さん

第4回スクール(12月14日)

### 新しい街の視点を考える

社会起業家・立木祥一郎氏に、現在、企画・運営・制作を行っているプロジェクトのお話や、平成23年6月オープン予定の「吉井酒造煉瓦倉庫」アート整備計画について聞いた。



ゲストの立木 祥一郎(合同会社tecoLLC代表)さん

第8回スクール(1月21日)

### 十和田デザインセンター、デザインの方向性

十和田デザインセンターのロゴやショップツールなどデザインの仕組みについて、小熊氏にかみくだいて披露していただいた。



講師は、アートディレクター・グラフィックデザイナーの小熊 千佳子さん/Photo by Masako Nagano(oiseau,Inc)

## 4

### 支援協力機関が事業に果たした役割



#### 対象地域、商店街へのヒアリング

十和田デザインセンターに期待することは、やはり商店街活性化に寄与することにある。その商店街において、一店舗としての商売だけを期待しているわけではなく、市民をはじめ店主や各施設の情報を集め、発信する機能を持って欲しい。デザインは、必ずしも、商品開発やパッケージデザインとして露出することがゴールではない。販売方法や緻密な情報発信こそが、いま最も求められているデザインではないだろうか。

(十和田市現代美術館館長 高屋 昌幸氏)



#### まとめ

受講生の間で「自分たちで十和田を盛り上げていこう」という意気込みが感じられ、コミュニケーションは濃密になった。

また、観光案内所(情報発信・収集機能、観光客に対する対応などを含んだ多種多様な要望を受け止める場)が十和田には潜在的に必要なだ、ということが明確となった。今後、新たな店主候補にこうした機能が商売として成り立ち、引き継いでいくためには、十分な準備期間が必要である、と考えている。

## 5

### 新たな課題とその対策について

今回の事業を通じて、特に十和田市現代美術館スタッフ、十和田市役所、観光協会、県庁職員などの講座参加が目立ち、意欲が伝わってきた。十和田市商店街に対する市役所や美術館の期待を、さまざまな場面で感じた。

十和田市商店街には、少しずつではあるが活気

が戻ってきた。商店街の中にまちづくり会社が計画している新たな商業施設の建設が始まりつつあり、町の風景は変わっていくだろう。既存のシャッター商店街も、活気を取り戻すために一歩を踏み出すことが必要だ。

#### 連携および 参加機関

- ・十和田観光協会
- ・十和田商工会議所
- ・アートチャンネルトワダ
- ・まちづくり十和田株式会社
- ・まちづくり稲生株式会社
- ・上十三地域の「道の駅」など